

マクロビオティックの先輩の

被爆体験

日本Cー協会

編集部

広島の前賀佐和子さん

東日本大震災による原発事故が震災復興の妨げとなり、その放射線汚染は国内外の大きな不安材料になっていま

す。自然界にない、放射線の大量放出による原発技術に賛成することはできませんが、マクロビオティックの先輩が広島、長崎の爆心地近くで被爆し、放射能に晒されながら立派に生き残った体験をお伝えすることによって、放射線の不安を取り除くことが、今とても大切なことのように思います。

広島在住の前賀佐和子さんは8才のとき、爆心地から2キロの地点で被爆しました。戦時下、分校に充てられた民家の庭で鞠つきをしていました。飛行機の音がして、見上げたとき、その飛行機が止まって見えたといえますから、

真っ直ぐ前賀さんに向かって急降下してきたでしょう。

昔、原爆を「ピカドン」といいました。しかし、前賀さんが感じたのは巨大な光だけで、ただその光の中に吸い込まれてしまったといえます。

大やけどで、家まで走って帰った前賀さんは水ぶくれで見るも無残な姿でした。髪の毛も眉毛も焼け、鼻も口も分からないほどはれ上がっていたそうです。前賀さんを救ったのは炊き出しのおにぎりの梅干でした。他の人のおにぎりからも梅干だけもらって食べました。ただ梅干が食べたかった。前賀さんはそれを「本能」と振り返っています。同じ被爆地点で生き残ったのは前賀さんただ一人でした。その後、前賀さんは放射能を知りたくて広島大学で物理学を学びますが、その回答は得られず、24才のとき桜沢先生に出会います。

そして、陰陽の原理を学び、自分の体験がその原理の実証であったことを知ります。前賀さんが1986年の講演「放射能の中を生きる」でお話された内容を記します。

「灰(死の)に遇わないようにしなくちゃいけないんですが、もし遇ったら、早く血液を変えていくことを考えなくちゃいけないですね。どんどん毒を外に出すことです。それには体をぐつと陽性化していく。塩気を摂っていきま。私の場合、梅干を食べました。塩気を摂らずに水を飲んだ人は死んでいきました。だけど、塩気を入れながら、どんどん血液の浄化をしていった人は、生きていると思うんですね。味噌汁を毎日食べました。味噌汁に海藻を入れて、味噌汁を食べること。そして、いろいろのおかずは食べないようにして、

葉っぱなんかは食べないようにして、穀物を食べることでですね」

勿論玄米食も強く勧められています。

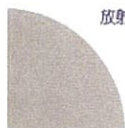
「玄米が一番良いです。非常に腸のぜん動を促しますから、便秘なんかすくに治つてしまいます。玄米を食べると、腸の中のいろいろ溜まったものを全部出していつてくれますから、宿便も通じが良くなりますからね。血液の寿命はだいたい一週間なんです。早く入れ替わりますから、血液をどんどんどんどん入れ替えて、それが生き延びていく一番良い方法じゃないかと思います。」

前賀さんはご主人(広島大学教官)と食養運動を推進され、現在も7人のお子様と14人のお孫さんに囲まれて元気に過ごしていらっしゃいます。前賀さんの体験はその講演が収録され、「原爆を超えて」「放射能の中を生きる」等の小冊子になりました(現在絶版)。

子供たちの未来をかけて



チェルノブイリ
原発事故の衝撃
放射能の中を生きる
前賀佐和子





長崎の秋月辰一郎先生

長崎の浦上第一病院の医師だった秋月辰一郎先生（1916〜2005）は爆心地から1・4キロの病院で被爆しました。桜沢先生との出会いは1943年11月のことでした。結核にかかった秋月先生はレントゲンで自分の心臓が「滴状心」だったことを知り絶望します。「結核は軽症であるが恐らく数年、あるいは一生仕事のできない生活を送らなければならないのかと悲観してしまっただ」（以下秋月先生の手記・桜沢叢書「心臓を入れ替える法」に収録）。秋月先生を救ったのは、結核の

専門医高原先生の勧めで参加した桜沢先生の講習会でした。

「講習会で私の胸に突き刺さったことは『体質は食物』ということと、『肺病、肋膜炎、塩不足』ということである」「塩気をうんと取る、動物性食品をやめる、玄米に「コマ塩を多く添える、砂糖、果物、嗜好飲料をやめる」。

「変化が次から次に身体の内におきて来た。脈拍が力強くなった、足が暖かくなり、薄着が快くなった、起床時の倦怠が無くなった」。

そして食養開始後2カ月のレントゲンで心臓が普通人のようになっていくことを確認します。

「体質は食物なり」という驚くべき明快な回答（西洋医学では体質は分らない）を私自身確かめ得てこんな嬉しうんとはなす」。

1944年の9月、秋月先生が浦上第一病院の勤務医に就任されたのは、「玄米、野菜食、海藻の味噌汁の三つで食物療法をやりたい」（以下先生の著書「死の同心円」）、との希望が受け入れられたためでした。そして1945年8月9日。秋月先生は職員や入院患者全員と玄米食を実践しな

がら原爆を体験することになります。

「頭上の遥か上空にブーという爆音のような音を聞いた……そのブーという奇妙な音響は強く大きく病院の上に覆いかぶさるように響いた」。

次の瞬間、白色の閃光走り、病院の建物に巨大な衝撃が加わります。爆弾を積んだ爆撃機の自爆のような衝撃だった。部屋は壁も天井も落ち、窓枠も飛んで無くなりました。2〜3階は全滅？しかし、直接の被害は、大腿部の骨折が一人、あとは打撲とガラスの破片による傷だけ、70名の入院患者に焼死者もいなければ重傷者もいませんでした。

「皆助かったじゃないか、ピンピンしているじゃないか」。

しかし、勿論、死の恐怖は身近に迫っていました。被爆は8月9日、そして、秋月先生は13日ごろから新しい疾病に直面する。

「その症状の患者は16日を過ぎると、にわかに数を増し、数日中に症状が悪化してバタバタ死んでいく」。

悪心、嘔吐から始まり、そして死を

予告する紫色の斑点が始める、いわゆる原爆症でした。死者は爆心地から同心円を描いて広がって行った。

「お陰で私はなんともない」と神に感謝のお祈りをした修道女が翌日には悪心、嘔吐が始まり、数日後には紫色の斑点を出して亡くなる、それは日常茶飯事の出来事だったといえます。

「爆心地から五百メートル以内で被爆した人は8月15日までですべて死んでしまっていた。500メートルから1500メートルの距離で爆撃を受けた人々は……9月下旬までにつきつぎ倒れていった」。

しかし、先生は次のように対処しました。

「私は想像と推理によってこれを『レントゲン・カーター』に似たものと断

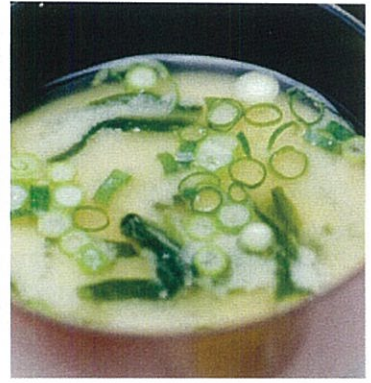


定し、私がそれに苦しめられたとき、よく食塩水を飲んだことを思い出した。レントゲン・カーターの患者に、生理的食塩水より少し多く塩分を含んだ水を飲ませることは、レントゲン教室で働いている者の常識であった」。

秋月先生は長崎医大付属病院の放射線教室に勤務した経験があり、レントゲン・カーター（宿酔）という気分が悪くなる症状を知っていました。

「爆弾を受けた人には塩がいい、玄米ご飯にうんと塩を付けてにぎるんだ。塩辛い味噌汁をつくって毎日食べさせる。そして、甘いものを避ける。砂糖は絶対にいかんぞ」

秋月先生は厳しく職員に命じて実行させたといえます。



「それは、私が信奉しているミネラル栄養論とも一致する考え方であった。私は石塚左玄氏の桜沢式栄養学を学び、自分なりに工夫して食養医学をつくり、みずから秋月式栄養学と名づけた。この考え方に立てば、食塩のナトリウムイオンは造血細胞に賦活力を与えるが、砂糖は造血細胞に対する毒素である。同じ野菜でもカボチャがいいが、ナスはよくない」

「浦上第一病院の患者と職員に、こうして私のミネラル栄養論を実践したが、ついでに死の灰がいっぱい付着したカボチャもずいぶん食べさせてしまった。せつせと味噌汁に入れて食べたので、二次放射能で腸をやられたかもしれない。もっとも、味噌の解毒作用によってプラスマイナス・ゼロになったと考えられる」

「虚弱体質の私が、1400メートルの距離で被爆しながら原爆症になら

ず、病院の職員や患者全員がレントゲン・カーターに似た自覚症状を感じながら、何とかそれを克服し、働き続けることが出来たのは、私はやはり食塩のお陰であり、秋月式栄養論の成果であったと思う。私の周囲にいた人々は、みなそれを信じている。たとえ学会には認められない説であっても……」。

「死の同心円」は自慢話だけの書ではありません。「食事療法やミネラル療法によって自分自身の肉体を改造し、さらにそれを著述して、近代西洋医学の矛盾を突く新しい体質医学を作り出そうとしたのだが、その夢は消え去った」と記す、挫折そして懺悔の書でもあります。同書からは、秋月先生の「深い反省なくして誠の進歩はない」とのメッセージが伝わります。同じ原爆体験をされた平賀佐和子さんが宝物とされている本でもあります。是非、「読んでみてはいかがですか？」



平賀 佐和子さんの“今”

2011年某日、平賀佐和子さんより一通のお手紙をいただきました。現在75歳。被爆体験を経てもなお、お元気な姿を垣間見ることができます。現在マクロビオティックを実践されている全ての方の励みになればと、ここにご紹介させていただきます。

※ご本人のご了解を得て掲載させていただいております。

拝啓

私が桜沢如一先生に御縁をいただいたのは、主人(一弘)の父・忠彰によります。原爆当時49才の父は、小学校の教員をしており、自宅のありました皆実町(爆心地から2~3km地点)で被曝しました。それ以来、身体の調子が悪く学校に復帰できず、ほとんど家から出られず、70才まで趣味の本を読み、自分で健康を取り戻したいと研究の一生を送りました。当時、大阪陸軍幼年学校1年生だった主人も原爆後1週間目に被曝し、体調が悪くなったと聞いております。

また、国民学校1年生であった6才の妹は、8月9日(被曝3日後)にほとんど無傷なのに死亡、9月には主人の祖母も亡くなり、また1年後には私と同じ年の8才の妹も死亡と、たくさんの悲しい目に遭いました。

主人は父の病気をなんとか治せるものならと色々な本を読むうちに桜沢先生の本に出会い、自分なりに玄米食を実行し、その何年か後に、桜沢先生がアメリカより帰国されたとき、大阪に行って直接、講演を聞いたそうです。その数日後、私も広島で桜沢先生の講演を聞き、その日より玄米とごま塩だけの7号食を1か月間実行いたしました。

「難あり即ち有難し」で被曝した8才のときから22~23才まで苦しみ、悩み暮らしましたが玄米食を実行し、生き抜きました。すべて自分の責任で、人のせいになんかなくて実験したのです。それまでは「安心」というものは無かったため、命がけで真剣に取り組みました。

結婚して妊娠しても我が子への最大の贈り物だと思い、いわゆる邪食はせず産み、学校給食も断って、7人の子供に玄米弁当を毎日作って育てました。世の中の批判も耳にしましたが、とにかく実行しました。健康学園にも一家で出かけ、勉強もいたしました。だから現在の私があるのだと思います。

私もあと少しで75才になりますが、運転もしますし、スキーもいたします。趣味の民謡、カラオケ、水彩画と、楽しい毎日を送っています。7人の子供もそれぞれ結婚し、孫は広島大学1年生から生後3カ月の赤ちゃんまで、皆元気に育っており、桜沢先生が「毎日、毎日がパースデー」といわれる生活ができているように思います。

表大なれば裏もまた大なり、活かし奢ることなかれです。今の原因が次の結果を産むからです。因果の世界であることを一時も忘れてはいけないと思います。

私にとって原爆に遭い、被曝するという困難な原因がなかったら、勉強もしなかったでしょうし、桜沢先生、里真先生にも御縁がなかったでしょうし、結婚もしていなかったと思います。



マクロビオティックの生活が真の平和をもたらし、実現できる法であることは、私を取り巻く家族の仲の良さ、兄弟、親戚の仲の良さが、証明していると思います。

安心、安全の生活は、単純な食生活の中にしかありません。現代は複雑で見えない世界になっているので、迷っている方が多いですが、玄米とみそ汁の生活をしていると、自信がつくのではないのでしょうか。(中略)

今の私は恩返し的人生です。よくここまで生かして頂いたと思っている毎日です。ありがとうございました。 敬具